

ポストコロニアリズム

講演会企画プレゼン 991029 犬飼太介

第0章 はじめに

文化なるものはその内部に無数の構成要素を抱え込んでいると同時に、外部からの無数の構成要素が交錯する場として存在する。このような文化の存在様式における複数性にはこれまで、異種混濁性(heterogeneity)、交雑性(hybridity)、差異性(difference)、周辺性(marginality)、下等性(subalternity)、他者(the other)、離散(diaspora)、所属関係(affiliation)、擬態(mimicry)、二律背反性(ambivalence)といった用語があてはめられてきた。このような複数の文化/文化の複数性はいかにして起こったのか？そしてその複数文化が絡み合う場には何があるのか？この問いに要請され出現したもの、それがポスト植民地主義(Post Colonialism)である。当論はこのポストコロニアリズム入門の体裁をとる。鶴飼氏の示唆<「ポストコロニアリズム」を語る場合、忘れてはならないことはこの言葉の原産地はアメリカ合衆国だということ> [\(注1\)](#)を踏まえ、主に英米のコンテキストにおけるポストコロニアリズムを扱う予定である。

第一章 ポストコロニアリズムとは何か

時系列的な区分け

1. コロニアリズム(植民地主義)

帝国主義的領土拡張政策における植民地支配期を言う。しばしばイデオロギーという観点において帝国主義 (Imperialism) との混同がなされる。

2. ネオコロニアリズム (新/脱植民地主義)

帝国支配を脱し、国民国家とまではいわなくともとにかく独立を勝ち取り、民族解放をさしあたり実現していくプロセスを指す。この過程においては旧宗主国からの軍事的・経済的支配力は以前として作動しており、問題は単線的ではない。この現実に対応した言葉として用いられることもある。 [\(注2\)](#)

3. ポストコロニアリズム (ポスト植民地主義)

一般的にはながらく植民地化されていた社会や文化が独立、あるいは解放を勝ち得た時期以後のことを指す [\(注3\)](#)。それは同時に、旧宗主国の状況についても共通に用いられる。帝国主義によって世界が組織された時代の遺産に直面することになる現在の世界を規定する基本的状況と見なされている [\(注4\)](#)。同時に、ナショナリズムや人種主義の問題も再び提起される。

包括的な意味合いでのポストコロニアリズム

< 植民地化された時点から現在にいたるまで、帝国主義のプロセスにさらされてきた文化の全体を指す > [\(注5\)](#) 言葉として用いられる。そこでは (旧) 宗主国と被植民地の双方において < 西欧の文化における植民地主義の存在を問い、検証する > [\(注6\)](#) 作業が求められ、西洋中心主義や帝国主義の < 植民地経営において (あるいは植民地関係を運営するところで) 共通にみられた言語に基礎をおく > < 植民地言説 > [\(注7\)](#) の分析を足がかりとした疑義がさしはさまれる。(詳しくは第

3章と第4章を参照のこと)。この「ポストコロニアリズム」で提起されたのは、<独立国家の誕生によって集結したように考えられた脱植民地化のプロセスを再度歴史化し、現在もいぜんとしてその途上にあることを浮き上がらせ、その措定された現在に対して新たな状況介入をすること> (注8)なのである。

このように、ポストコロニアリズムとは文学批評なのか、解放を目指した政治論なのか、理論であるのか、実践であるのか、読み方の変容なのか、非常に曖昧なままである。この曖昧さが、問題の複雑さを表しているのかもしれない。

第二章 Post Colonialism という言葉

colo -culture -colony

colony の語源はラテン語の colo (耕す、栽培する、住む、世話をする) であり、その派生語には culture がある (注9)。これが示すものは何か。植民地と文化とは不可分なものであり、植民地化のプロセスには様々な文化の流入が起こったという観点である。(前述の第0章における複数文化と植民地との関係の結節点)。そして、以下の二点への広がりを見せる。

1. colon -culture -agriculture

OEDによると、colony の英語における最初の使用は colon (開墾者、農夫、栽培者、耕作者、入植者) から引用されている。上記の前提を踏まえるならば colony と culture の類縁性以外にも culture は農業 (agriculture) と関係し、都市 (civitas) から派生した文明 (civilization) と差異化される (注10)。ここでは新しい土地を開墾 = 入植するものは何もなかつ

た土地に文化を与えることと同義となる。そのような見地は、コロニアリズムにおける文化的同一化がはかれると同時に、被植民地のネイティブ=他者を<下位のものとして位置づけ、(侮蔑的な悪い意味で)「欠如」とする発想に基づ> [\(注11\)](#)くイデオロギーの産物といえよう。

2. 文化と教養

culture は「文化」の他に「教養」といういまひとつの意味を持つ。もし文化=教養が各々の社会にある洗練化(cultured)と高尚化(cultured)をうながす要素を持つ概念だとするならば、<やがて、この文化〔=教養〕は、国民とか国家と、しばしばひと悶着あったうえでむすびつけられるようになる。このような文化〔=教養〕が「われわれ」と「彼ら」を区別する。そしてそこにはいつもなんらかの外国人恐怖がふくまれる> [\(注12\)](#)。つまり文化はある種の砦となり、外部=他者を排除する。それは逆説的に内部を規定する動きであり、これまで他者であった被植民地(人)を帝国主義自らへ同一化させるために文化を必要としたのだ。

Post - という接頭辞

素朴にみればクロノロジカルな意味での "after" と同義であり、"beyond" という字義を加えてもいいかもしれない。しかしポストコロニアリズムは決して過去のことではない。形式的独立以降という点においても、コロンブスのアメリカ大陸到達以降という枠でとらえられるポストコロニアリズムはどのように規定されるのか？ ひいては、世界同時多発的に独立化はおこったのではない現状をどう捉えるのか？ <「ポスト」が、いつを起点にしての「ポスト」なのかということ自体、問題の一部をなしている> [\(注13\)](#)のである。

ポストコロニアリズムは<過去の植民地状況からその生命を
えているという条件から逃れ得ない> (注14)。<植民地時代
とは、文化と政治体制の「完全な独立」が達成されればすべ
て過去のものとなる、一時的な歴史段階にすぎない。だがも
う一方には、そのようなことは不可能であるばかりか、文化
的な混合性という特色は、すべてのポストコロニアル社会に
とって避けられない> (注15)。<ポストコロニアリズムの「ポ
スト」は、コロニアリズムが終わったという意味ではない。
(中略)一般の意識においては過去とみなされていながら現
代のわれわれの社会性や意識を深く規定している構造、それ
をどう考えるのか、それとどう向き合っていくべきかという
問題提起が、この接頭辞には含まれている> (注16)のだ。

第三章 ポストコロニアリズム具体例、ポストコロニアリズムにおけ る他者

ポストコロニアリズムの文脈では「ポストコロニアリティ
とは強姦によって生まれた子どもである」と語られる。この
比喩はいったい何であるのか？ それを解き明かすとき、現
在世界の大国であるアメリカ自体、植民地であった過去が強
調される。

アメリカ大陸という女性

コロンブスは自身の航海誌において土着の民は<女
も、母親が産んだ時と同じ状態の裸で歩いております
> (注17)という一文を記録している (注18)。この<
部分的記述>が帝国主義イデオロギーによって<全体
の物語に仕立て上げ>られてしまった。<イデオロギ
ーは部分を、当然の「常識」や「自然」として、とき
には「現実それ自体」として表現することによって、

これを成し遂げる > [\(注19\)](#)。ここにおいて新大陸アメリカ [\(注20\)](#) は往々にして男性侵略を待ち受ける裸の女として表象され、「処女地」という単一像がヨーロッパのために産出される [\(注21\)](#)。そして裸のアメリカは着衣し武装したヨーロッパにレイプされる。

インディアン（ネイティブ・アメリカン）という他者

しばしば植民地支配において、その土着の宗教、人種は悪魔化（demonize）される [\(注22\)](#)。これは植民地支配において宗教的プロパガンダも利用されたという傍証に過ぎないが、ここにおいて被植民者＝他者は異教徒＝敵・悪魔となる。「新大陸発見」がもたらしたのは本当の先住民の「発見」ではなくおのれの規律から逸脱する「インディアン [\(注23\)](#)」の「発明」であり、ここから「アメリカ」というひとつの歴史が創始された [\(注24\)](#)。本当に「発見」されたのは先住民を「野蛮」とみなす帝国主義自体の「野蛮」さであったのだろう。

黒人（アフリカン・アメリカン）という他者

奴隷化された黒人 [\(注25\)](#) は、これまでの自らの立場から切り離され、同じ言語集団から意図的に遠ざけられ、プランテーション経営者の言語を用いることを強いられ、白人主人の意のままにされる。黒人女性に至っては、その肉体をも白人の所有物とされ、セックスの道具となり、私生児を産むことを余儀なくされた。ここで出てくるのが混血児の問題である。植民地世界は容貌・肌の色によって階級づけられた明確な二項対立の世界である。だが境界を生きる混血児は人種間のバランスを脅かす危険な存在とみなされ、ややもする

と植民者/被植民者の体制を覆し墮落させるタブーとされた。故に混血児（混血男性よりも混血女性）は何世紀にもわたって邪悪で悪魔的な存在とみなされることとなった。[\(注26\)](#)

ポストコロニアリズムにおける他者

この章では帝国主義による植民地のレイプを具体例に即して扱ってきた。だが注意しなければならないのは、ヨーロッパは一枚岩ではないことである。ヨーロッパの内部においては複数の文化があり、その各文化も複数の構成要素から成り立っている。それは被植民地においても同様であり、帝国主義によるレイプを経たあと、その他者性 (alterity) は変容 (alteration) する。そして、その複数性たるや安易に論ずることがためられる程の重層性を持っている。その複数性を踏まえつつ、植民地時代にその他者たちが帝国主義の言説によっていかに表象されてきたか、それがいかに現実にはありえないかたちで存在を強要されてきたか、
<<いまだ -なお 読まれない>他者として提出し、存在不可能 (ホスト注：表象不可能) な他者をありうるかたちで存在させることが > [\(注27\)](#) 可能であるか。これがポストコロニアリズムにおいての重要な点であろう。もう一点。帝国主義は被植民地の他者を共犯に仕立て上げることなしには機能しない。<だからこそそれは、単純な対立や矛盾に還元しえない複雑な、したがってより深刻な痕跡を植民地社会に遺した > [\(注28\)](#) ののである。

ポストコロニアリズム文学

第一に、かつて西欧列強によって植民地化されていた社会（注29）において書かれてきた、また独立して存在する成員あるいは民族の手で書かれている文学を指す。だが、第一章で述べた包括的ポストコロニアリズムという視点を導入するならば、文学という表象営為のほとんどがポストコロニアリズム文学と言ってもよいかもしれない。それは、以下の視点に関わる。

ポストコロニアリズム批評

第一章で少々触れたように、重要なのは帝国と被植民地との関係でなされた表象化である植民地言説を対象とすることである。そこで問題とされるのは＜他者性の再現＝表象の様式であり、それは「西洋」がこうした諸言説内にいかに使用されているか＞（注30）という点である。

帝国による支配の時期には、＜読み書きの能力を身につけ、自分たちの存在を（中略）植民地支配者の権力と同一化させたエリートたちが、帝国の中心地の言語による著作を生産していた＞（注31）。植民地においては＜「文学」という制度自体が、帝国の支配階級の直接的なコントロール下にあり、またその支配階級のみが、許容される表現形式を定めたり、そのなかで生産された作品に、出版や頒布の許可を与える権限を握っていた＞（注32）のである。そうした＜芸術作品なり学問的著述を、よるこびや知識とむすびつけるだけでなく、それらが明白なかたちで、あるいは隠れたかたちで所属している帝国主義的過程とむすびつけること＞（注33）によって、文学批評は新たな視点を得る。この批評は＜すでに植民地支配は終焉した、自分はそれ

とは関係ないという思い込みをも問いなおす営為>(注34)として響く。そして現在、シェイクスピア『テンペスト』の再読、H.ジェームズやT.S.エリオット再考などの動きが出ている。鵜飼氏はジュネの中にその問題を見出している(注35)。

「正典 (canon)」への疑義

そのような読み直しは、これまでの文学史等の評価を一変させる。これまで「周辺/周縁」のものだった文学が取り上げられ、同時にこれまで「正典」と目されてきたものの位置づけをも変容させるからだ。

そもそも正典とは国家的/国民的な文学を指し、その形成はナショナリズムの一面を支える。イギリスとアメリカを例にとれば、英文学はその「古さ」「伝統」によって中心的權威を保持し、そのアンチテーゼとして米文学は「新興性」を対置する。だがひとたびポストコロニアリズムの視点を導入してみると、英文学こそが様々な外部からの流入によって支えられていることが判明する(注36)。ひいてはその正典を守ってきたイギリスのアカデミズム内における英文学科ですら、植民地で生まれたものだ(注37)。このような視点は、これまでの西洋中心主義、帝国主義という父権的イデオロギーを曝露する。イギリス内部だけに限っても、正典が織りなしてきた国粹主義/民族主義的 (nationalistic) なイデオロギーですら曖昧なものとなるのだ。

日本と帝国主義は無縁ではない。むしろおおいに関係がある。だが、アメリカで生まれたこの「イズム」を、安直に日本に応用してもよいのだろうか？ 鵜飼氏が「なぜ日本では「ポストコロニアリズム」に見合うような言葉や問題意識が成立しなかったのか、あるいはより単純に、なぜ日本では植民地支配の問題が一般的な思考の地平とならないのか」> [\(注38\)](#)と述べるとき、そこには一体何があるのか？

鵜飼氏による日本固有の問題

鵜飼氏によれば、

<日本では植民地支配の記憶が第二次世界大戦という世界戦争の記憶と非常に深くクロスしていることがある。(中略)日本の場合は、戦争の記憶と植民地支配の記憶とが時間的・空間的な連続性のなかで重なり合っており、世界戦争の記憶が抑圧されれば同時に植民地支配の記憶も抑圧される構造がある。(中略)日本の戦争責任がもっとも追求されなくてはならない時期に、冷戦のためそれが妨げられてしまうということなんとも皮肉な経緯がある。> [\(注39\)](#)

そして原爆により、広島がヒロシマへ翻訳され、世界化される時、日本があたかも第二次世界大戦の被害民族であるかのような表象が出来上がったという。その中で、アイヌ、沖縄、戦時中の植民地を隠蔽していった日本の戦後を鵜飼氏は告発する [\(注40\)](#)。

<戦争の記憶ひとつ取っても、沖縄には別の歴史的な時間性があるし、空間性においても、沖縄の場合、列島として表象される日本といかに異なる条件にあるかということが、今、アジアの他地域との関係で浮かびあがってきています。そうしたことをすべてが、おそら

くわれわれにとってのポストコロニアルのコンテクストを構成するのではないのでしょうか > [\(注41\)](#)。

ポストコロニアル리즘の翻訳、そしてクエスチョン

国としての日本、地域としての東アジアにポストコロニアル리즘を翻訳すること。そこには何が見えるのか？そして鶴飼氏がその論のなかで宙づりにした問い、

< 「ポストコロニアル」期においては、かつてサルトルが『文学とは何か』（一九四七）で提起した「誰に向けて書くか」という問題、読者の選択が同時に主題と文体を規定するという問題がいよいよアクチュアルなものとして現れてきているのである。マイノリティの言葉が真に変革の力を獲得するにはどんな宛先を見出せばよいのか？ そしてこの問いは、「ポストコロニアル」文学の読者であるマジョリティに属する者にはどんな意味を持っているのか？ > [\(注42\)](#)

このクエスチョンの回答は何なのか？

第六章 翻訳とポストコロニアル리즘

当論で扱ったポストコロニアル리즘と、我々のテーマである「翻訳」の結節点はどこにあるのだろうか？

文化と文化の折衝、その異種混淆性

植民地支配において言語統制による同一化がはかられたのは周知のとおりである。これまでは文化の異種混淆性に重点をおいてきたが、その様態は言語にもあてはまる。例えば<カリブの奴隷たちは、同じ言語集団の人から意図的に遠ざけられ、プランテーション経

営者の言語を用いることを強いられたのだが、その目的は、彼らの反乱の可能性を最小限に押さえ込むことにあった。このような意味で英語とは、奴隷たちにとっては、彼ら自身の搾取を容易にするために支配者たちに強制された、分断のための言語だった > [\(注43\)](#) のである。言語は混淆し、複数言語が共存する空間が植民地において確立される。植民地はまさしく < 何らかのかたちで衝突がつねに生起する領域(conflict zone) > [\(注44\)](#) なのである。

文化の接触領域と翻訳の場

翻訳とは言語の転用 = 分有の場であり、そこでは言語が国家や文化の代表として相争う場所とも受け取られる。第二章でみたように、文化がある種の内部を形作る動きというのは、言語が自らの翻訳不可能性を盾にその固有性・統一性を固守する動きと同構造である。翻訳はその単一構造を破壊する。翻訳言語によって生まれるナショナリズム・レイシズムは、まさしく翻訳によって解体される。 支配 被支配の関係は起源（オリジナル）と翻訳の関係といえる。同時に、接触領域において行われた文化・言語の転用 = 分有は翻訳の場として受け止められよう。複数の文化における翻訳。鵜飼氏に語っていただくには絶好の逸材であろう。（詳細は次回[翻訳論のプレゼン](#)にて）

第九章 おわりに余談

ポストコロニアリズムはそれ自体非常に様々な領域と接触している。ポスト構造主義やマルクス主義、新歴史主義、カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム等々。細かな接触

点の説明は割愛するが、ポストコロニアリズムすべてはこのレジュメでまとめきれぬ類のものではない。「すべて」という言葉自体も疑問にふされるかもしれない。ポストコロニアリズムは現在も継起する問題である。＜日本は遍在する西洋にすでに組み込まれており、歴史的にも地勢的な意味においても日本を西洋の外部とみなすことはできない＞(注45)＜今日ではもはや、他者として識別される「西洋」なるものは存在しないのである。われわれはすべからず、西洋の一部と化しているのだ。西洋の世界化が完了した現時点においては、世界のすべてが、西洋を自らの一部としていて、だれもこの条件からのがれられないのである＞(注46)との指摘もある。ポストコロニアリズムに、どんな領域であれ、我々は無関心たりえない。

＜＜ポスト・コロニアル＞という言葉の＜ポスト＞とは、植民地問題が「過去の不幸な一時期」という括弧のなかに隔離できるものではなく、つねに、現在の、そして未来の問いとして回帰してくる必然性を示唆しているように思われる＞(注47)この鶴飼氏の提言を以て、終わりにします。

脚注

注 『＜複数文化＞のために』(複数文化研究会編、人文書院)鶴飼哲「ポストコロニアリズム」
1 p.39

注 定義化は『批評空間』(1996・-11、太田出版)「共同討議 ポストコロニアルの思想とは何か」p.11、富山一郎の発言を流用した。

注 『差異と同一化』(山形和美編、研究社出版)山形和美「ポストコロニアル文学論序説」pp.3-4
3

注 西谷修、鶴飼哲、港千尋『原理主義とは何か』(河出書房新社)西谷修「世俗性とその影」p.214

4

注 B.アッシュクロフト、G.グリフィス、H.ティフィン『ポストコロニアルの文学』(木村茂雄
5 訳、青土社) p.12

注 『越境する世界文学』(河出書房新社)大橋洋一「ポストコロニアルの文学/批評」 p.262
6

注 P.ヒューム『征服の修辞学』(岩男龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳・法政大学出版局叢書ユニ
7 ベルシタス 458) p.2

注 前掲『<複数文化>のために』富山一郎「赤い大地と夢の痕跡」 p.119
8

注 鶴飼哲『抵抗への招待』(みすず書房) p.304
9

注 G.C.スピヴァック『ポスト植民地主義の思想』(清水和子・崎谷若菜訳、彩流社) pp..229-230
10

注 レイ・チョウ(周蕾)『ディアスポラの知識人』(本橋哲也訳、青土社) p.58
11

注 E.W.サイード『文化と帝国主義・』(大橋洋一訳、みすず書房) p.4
12

注 前掲『批評空間』鶴飼 pp..7-8
13

注 前掲『差異と同一性』山形和美 pp..3-4
14

注 前掲『ポストコロニアルの文学』 p.57
15

注 前掲『<複数文化>のために』鶴飼哲 p.42
16

注 『コロンブス航海誌』(林屋永吉訳、岩波文庫) p.173

17

注 コロンブスは「命名者」でもあった。彼は様々な土地・事物に名前をつけていった。あたかも植民者到着以前には空虚で不毛な空間しかなかったと言わんばかりに。この命名によって、植民以前にあった世界は、植民者の名前を押しつけられることによって消えていった。名付けていくこと。それは植民地へ押しつけられた言語という問題の顕著な例であるだろう。

注 前掲『征服の修辞学』p.20

19

注 「アメリカ」という名前は、発見者であるアメリゴ・ヴェスプッチの名前「アメリゴ」の女性形。

注 巽孝之「アメリカ文学の思想」バベル・プレス『翻訳の世界』誌連載中

21

注 前掲『ポストコロニアルの文学』p.351

22

注 19世紀アメリカ文学においても、その表象化はなされている。たとえば N.ホーソーン「ヤング・グッドマン・ブラウン」等においても、悪魔とインディアン、森、魔女が同列化されている。

注 前掲『<複数文化>のために』本橋哲也「ネイティヴィズムの詩学」p.282

24

注 ホミ・バーバはこう述べる。<黒人というのは、野蛮（人喰い人種）であると同時に、もっとも従順で威厳のある従僕（食料を担う者）である。彼は過激なセクシャリティの体現であり、しかし子供のように無垢だ。彼は神秘的で原始的、素朴な心の持ち主で、にもかかわらず世間ずれした、卓抜した嘘つきであり、社会的な力の操縦者である>。ここではその他者の持つ複数性・両義性が示されている。

ホミ・バーバ「差異、差別、植民地主義の言説」（上岡伸雄訳）『現代思想』1992.10 p.77

注 前掲『<複数文化>のために』マリーズ・コンデ「女たちの言葉」（元木淳子訳）p.192

26

注 前掲『越境する文学』大橋洋一 p.263

27

注 前掲『抵抗への招待』 p.259

28

注 このような曖昧な書き方しかできないのは、第一章で述べたとおりの理由があるためである。

29

注 前掲「差異、差別、植民地主義の言説」 p.63

30

注 前掲『ポストコロニアルの文学』 p.17

31

注 *ibid.*, p.19

32

注 前掲『文化と帝国主義』 p.6

33

注 前掲『差異と同一化』齋藤一「英文学制度とコンラッドの「青春」」 p.136

34

注 前掲『抵抗への招待』 pp.5-54 を参照のこと。

35

注 J.コンラッドはポーランド人、J.ジョイス、W.B.イェーツ、G.B.ショウはアイルランド人と
36 言ったように、彼らはイギリス外部の出身である。

注 大橋洋一『新文学入門』（岩波書店）第三講を参照のこと。

37

注 前掲『<複数文化>のために』鵜飼哲 p.45

38

注 *ibid.*, p.45

39

注 前掲『抵抗への招待』 p.254

40

注 前掲『批評空間』 p.10

41

注 前掲『<複数文化>のために』 鶴飼哲 p.48

42

注 前掲『ポストコロニアルの文学』 p.52

43

注 前掲『<複数文化>のために』 p.306

44

注 前掲『ディアスポラの知識人』 p.18

45

注 前掲『<複数文化>のために』 ジャッキー・ダオメ「アンティルのアイデンティティと<クレオール性>」(元木淳子訳) p.172

注 前掲『抵抗への招待』 p.255

47